

七点

②口重き祖父の一言寒牡丹

平野 邦子

九十六歳まで長生きした祖父は、秋のお彼岸に眠るように逝きました。お酒、タバコもせず、毎日の散歩、体操を欠かさず、日記には時々俳句を誰かに見せるといふものではなく季語の重なりも関係なく書いていました。そのような真面目で余計なことは言わず存在感のあつた祖父を、ふと寒い冬に藁の囲いをほどこした中に大きな花を凍らして映かせている牡丹を見て懐しく思い出しました。

餅花は、餅を練りつぶしたものに色付けし、小さく丸めて、柳の枝に沢山付けて小正月に飾ります。最近ではほとんど見られませんが、先日、瀬谷区の長屋門の古民家を訪ずれた時、大きな壺に挿して座敷に、そして台所に飾られていました。柔らかな春の日差しと相まって、煤けた座敷を明るくしている餅花を可愛らしく思い、句にしてみました。

寒月光湖へ向け置く椅子ひとつ

恩田 才美

奥琵琶湖の旅の句です。湖上の寒月の鋭さが、音となって降り続けているようでした。

六点

③点眼の瞳に冬日あふれくる

藤崎安紀子

眼科の定期健診へ行くといつも瞳孔を開く目薬を使うので、帰路は眩しくてしかたがありません。中でも冬場は大陽が下の方にあり、真っ直ぐに陽光が飛び込んでくるので、光が強くて目をあけていられない位です。その時の様子も句にしてみました。

④凍蝶に生の序列のありにけり

増田 守

凍蝶は歳時記に説明されているように日溜りにいる小さな生命体である。生命は等しく価値のあるものであり、これに生の序列、言い換えれば、死の序列を想起することは、全く不適なことであるが、この度のクルーズ船の隔離問題を考えるとき、他人任せ、ルール任せの人生はつくづく怖いものである。

①目覚めしも夢のあと追ふ霜夜かな

増田 守

老人の平均的生活であろうか、朝方四時頃に目覚めることが多い。大方はまた眠ろうとする無駄な試みをする。夢の中では健脚を競っている自分がある。失なつた機能のことをいつまで思っているも仕様のないことであると、頭では理解しているが、まんじりともせず、また夜が明ける。何か「用」があるのであろう。

①加賀手毬紅くころがる冬座敷

恩田 才美

能登の旅での句です。平氏子孫の豪邸時国家のお座敷。見事なしつらえに感動。私は一時期、趣味で手毬を作っていたことがあります、加賀手毬の彩色の明、旧家の座敷の暗を対比してみました。

五点

①和布刈る瀬宜の手先の赤きかな

柏尾のり子

和布刈神社は、西暦二百年に創建されたと言われる古い神社です。目の前に関門海峡の速い潮の流れる狭い境内に、小さな社殿があります。その岩場に下りて神官が和布を刈る神事は、真夜中に行われるので、一度行きたいと思いつつテレビのニュースで見ただけです。今年も冷たい海につけた神官の手が寒さで赤くなっている様子

椿平や母のことなど姉に聴く

服部 直子

幼くて母と死別したので、元気な頃の母のことなど姉に聞いているのです。

四点

買初や達者を願ふスニーカー

藤本 友子

今、私の楽しみの一つは、ハイキングや街歩きです。快適に歩くためには、足にピッタリと合う靴が大切です。そこで買初は、スニーカーということになりました。いろいろ吟味したスニーカーで、今年も元気に歩きたいという願いを込めて句にしました。